

C 「日本人の女の子まおのスピーチから考えよう」

■スピーチの背景

「権利が奪われて困っている子ども」と聞くと、開発途上国の貧困などで苦しんでいる子どものことを思い浮かべるかもしれませんが、私たちの住む日本にも、差別やいじめや暴力で、心がつらくなって苦しんでいる子ども達がたくさんいます。最近では、いじめの種類が多様化して、インターネットを使った「ネットいじめ」が急増しており、世界的にも問題になっています。

いじめをしている側は、いじめているつもりでなくても、いじめられている側の子どもはつらくて苦しい思いをしています。気づかぬうちに「いじめ」にかかわっていたということもあるかもしれません。いじめの被害にあっている子どもは、誰かに言っていじめが悪化したらどうしよう、自分が悪いと責められたらどうしよう、と不安な気持ちになり、怖くて助けを求めることが難しくなってしまうことが多くあります。

2016年度のいじめ認知件数は32万件以上とされています。もし、近くでいじめや差別などで困っているけれど声をあげられない仲間がいたら、その仲間のために立ちあがる責任が私たち一人ひとりに、あるのです。子どもには、誰しも、守られ、生き、育つ権利があります。いじめや差別や暴力から、子どもは誰でも守られる権利があるのです。悩んでいる人がいたら、自分は守られ、生き、育つ権利があることを思い出してほしいと、まおは訴えています。

■まおのスピーチ

私は、大学1年生で小林まおといいます。私は今、楽しく学校に通っていますが、小学校低学年の頃はまったく違う生活を送っていました。昔から恥ずかしがりやだった私は、人と話すことが少ない子どもでした。さらに、小学校1年生の時の担任の先生が箸の持ち方が違っただけで、座っている後ろから蹴って注意するような先生だったので、毎日怒られないように必死に「いい子」を演じるようになっていました。

そんな先生に媚びるような態度を取っていた私が気に入らなかったのか、それから高学年の人によるいじめが始まりました。乱暴な言葉をなげかけられ、暴力をふるわれました。木の枝を無理矢理食べさせられたこともあります。生きていて楽しいことなんてないと思い始めていた頃、私の親が私がいじめを受けていることに気がつきました。その後、家族や友達や学校の協力により人生をもう一度やり直したいと思えるようになりました。

日本では、平成28年に2万1764人もの人々が自殺で命を絶ったというデータがあります。このうちの493人は、19歳までの子ども達でした。そのうち151人は学校の問題が原因とされています。

(※厚生労働省データより) しかし、日本では遺書等の自殺を裏付ける資料がなければ自殺と認められず変死と済まされてしまうことが多いので実際はさらに多くの人々が自殺をしていると考えられます。また、自殺未遂者も含めるとさらに多くの子どもが人生を諦めてしまっている現状があります。

なぜ住む世界は同じなのに生きることを諦めてしまう人がこんなにもいるのか。私は、子どもの私だからこそできることが必ずあると思い、文章を書くのが好きなので、この現状を文章で伝えようと思いました。

高校2年生の時、朝日新聞の声の欄に私がいじめと同年の友人の死から学んだ命の尊さについて書いた文章を載せていただきました。ある小学校では、これを見た校長先生が他の教員の方々に紹介して下さり、いじめについて考える授業を行ったそうです。これが私の世界を変えるための第一歩でした。その後、学校の先生にフリー・ザ・チルドレン・ジャパンを紹介してもらいました。すぐにメンバー登録をして、講演会でスピーチなどをするチームに入り、学校やイベントで自分の経験したことを話す活動を始めました。高校3年生の時に、「世界一大きな授業」というイベントで国会議員に教育の大切さについて授業をしたこともあります。

フリー・ザ・チルドレン・ジャパンの活動は、世界中の自分の権利を主張できないでいる子ども達のために、子ども自身の私たちが立ち上がり世界を変えていくというものです。ここで皆さんに忘れてほしいことがあります。それは、今、自分が住んでいる、日本のこの町も世界の一部であるということです。

世界には貧困で苦しんでいる子ども達は大勢います。でも私たちのすぐそばで心の貧困で苦しんでいる子ども達も何十万人もいます。皆で子ども達のために立ち上がりましょう！私たちができるとは困っている仲間を見捨てないことです。加害者がいる時は先生が呼んでいるなどと声をかけて逃げ道を作って、一人でいる時は勇気を出して声をかけてあげてください。それが難しいなら信頼する大人に相談したり、匿名で先生や校長先生に手紙を出したりすることもいいでしょう。このような小さくても勇気のある行動で今いじめに苦しんでいる多くの命も救う事ができます。ユニセフ親善大使だった女優のオードリー・ヘプバーンさんはこう言いました。“As you grow older, you will discover that you have two hands, one for helping yourself, the other for helping others.” “As you grow older”は、直訳すると「年をとると」となりますが、私はこう訳したいと思います。「人は、人生において経験を積んでいくと、自分には二つの手があることに気づきます。ひとつは自分を助ける手。そして、もうひとつは他人を助ける手。」このように訳したのは、今の子ども達の私たちにも誰かの力になることはきっとできると信じているからです。皆さんもその手で誰かを助けてみませんか？